高校入試のしくみ

高校入試は、中学３年生にとっては最大の試練であり、保護者にとっても心配の種が尽きないものです。入試制度は、公立・私立共にそのしくみが異なると共に、年々変化しています。そのため、教師にとっても３年前の進路指導の経験が役に立たなかったりします。

特に初任者にとっては、業界用語をはじめとして覚えることがたくさんあるため、日々学習して力をつけていく必要があります。ここでは、進路に関する３年次の１年間を時系列で追ってみましょう。

１　進路説明会・進路学習会

生徒向け、保護者向けの進路に関するガイダンスで、３年職員が主体となって資料を作り、入試までの流れや進路情報・手続き・留意点などを説明する会です。

年間２回（６月･10月）行います。

２　実力テスト

校内で行う業者テスト（有料）。年間４～５回実施し、６月を第１回として客観的な成績の推移をみて、三者面談の資料とします。偏差値は使わないが、標準値を使います。

３　高校体験入学

保護者や生徒向けに高校が行う説明会や体験入学です。夏休み中に行われることが多く、生徒が自分で希望する高校に申し込み、参加します。高校側の担当者や高校生も丁寧に案内をしてくれます。

４　三者面談

生徒と保護者と担任の三者で行う面談。年間２回行います（７月・11月）。７月は進路希望の確認や夏休み中の留意点等が中心。11月は志望校の決定が中心。特に私立高校は、11月中に決定しないと入試相談に間に合わず手遅れになります。志望校が親子で食い違った場合、決定は最後は本人に行わせます。そうしないと失敗したときに親のせいにしてしまいます。

５　志望校の組み合わせ

第１志望１校と安全圏１校の組み合わせが一般的です。

（１）公立第１志望の場合、私立を安全圏にもってきます。これには、私立入試が先に行われるので、まず１校合格して、安心した状態で公立に臨みたいという思いがあります。

（２）私立第１志望の場合、公立を安全圏にもってきます。この場合、私立が受かった時点で公立は受検を取り消すことになります。

６　単願と併願、単願推薦制度と併願推薦制度

（１）単願とは、私立を第１志望とすることです。高校にとっては、合格したら必ず入学してくれるので、一般の受験者よりも合格基準を下げて、優遇しています。

（２）併願とは、第２志望以下のことです。第３・第４志望もすべて併願といいます。合格基準に優遇はありません。（第2･第3併願とランク付けしている高校はあります。）

（３）単願推薦制度とは、単願であって、高校側の求める推薦基準（内申点等）をクリアーしている受験者を優遇する制度です。具体的には、３年次の２学期の通知表のうち、「５教科の評定の合計点が１８であればOKですよ」という様な基準です。例えば３つの教科で４をとり、２つの教科で３を取れば、合計１８となり、クリアーするわけです。

（４）併願推薦制度とは、併願であって、高校側の求める推薦基準（内申点等）をクリアーしている受験者を優遇する制度です。具体的には、３年次の２学期の通知表のうち、「５教科の合計点が２０であればOKですよ」というような基準です。例えば５教科がオール４であれば、合計２０となり、クリアーするわけです。

７　部活動推薦は必ず担任を通す

部活動で高校の顧問から勧誘があった場合、必ず担任には話を通しておく必要があります。顧問同士で話を進めてはいけません。高校の顧問が生徒の両親に会いたいという場合、いきなり会わせるのは危険です。どういう条件で話をしたいのかあらかじめ把握した上で保護者に打診をし、会ってもいいとなれば会わせます。この辺は、顧問と担任が同一歩調で保護者と対応する必要があります。

高校の顧問が合格を約束した場合でも、決定権はありません。学業成績が伴わなければ土壇場で切られる恐れがあります。高校には入試の担当者がおり、その担当者の言うことが優先されるので、12月の入試相談には必ず載せて確認する必要があります。

中学の顧問は保護者に対して安易に太鼓判を押してはいけません。うまくいかなかったときにトラブルになる恐れがあります。

ある公立高校の強豪サッカー部顧問の話。「私には推薦の枠があるから、お前をとれるから。」と生徒に受験するよう誘いました。喜んだ生徒と保護者は、第一希望での受験を希望しました。この生徒は、部活動には所属せず、クラブチームに所属していました。この時点では担任を通していませんでした。ところが内申点が出た結果、合計点が足りません。これを知った高校の顧問は、担任に対して「内申点を上乗せしてくれ。」と要望してきました。「これには応じられない。」と言うと、「では他の高校に私の知っている顧問がいるから、その高校への受験を勧めてくれ。」と言ってきました。結果この顧問に振り回され、トラブルとなりました。

８　入試相談会

私立高校が主催する入試の相談会のことです。受験生獲得のための青田買いを防ぐために、毎年12月15日解禁と決められています。中学校教員が、その高校を志望する生徒全員の成績（内申点）を持って各高校に出向き、高校担当者と合格可能性について相談します。

ここで高校側が提示する基準（通知表の評定の合計）に達していれば、受験した場合、有利となります。基準に達していなくてもプラスαの情報があればいい返事をもらえることもあるため、交渉術が必要です。受験情報等のweb上では、合格が約束されると表現されていますが、学校では、確約とは表現していません。

しかし、ここでいい返事をもらえなかった生徒の場合は、合格可能性は低くなるので、再度三者面談をして志望校を検討する必要があります。12月15日に間に合わせるために、３年職員は早めに評定を済ませておく必要があります。ただし公立高校にはこの制度はありません。

９　拡大進路検討会

生徒一人ひとりの志望校や合格可能性について検討する会議です。全生徒の成績と受験校、合格可能性などが載った一覧表を作成して資料とします。拡大なので３年職員に加え、校長・教頭をはじめ教務部、１・２年の学年主任、特別支援担任者等がメンバーとなります。全生徒が終わるまで長時間かかるため、夜遅くまでかかります。12月の入試相談前後に実施します。昔は査定会と言われていましたが今は使っていません。

10　前期入試と後期入試

受験機会を増やすために、同一校が時期をずらして入試を２回実施する制度です。千葉県の場合、私立は前期入試が1月17･18日、後期入試が2月5日、公立は前期選抜が2月3･4日、後期選抜が2月25日と続きます。いずれも学力検査や面接等が主となります。

（１）私立の入試は、前期で終わってしまう学校や、後期で若干名募集する学校が多い。また併願の成績上位者を特待生扱いにして、他校に流れないようにする学校もあります。いずれも公立の入試前に定員を確保しておきたいという思惑があります。

（２）公立の入試は、普通科は前期選抜で定員の30～60％募集と定められているが、上限の60％を取る学校がほとんどです。後期は、定員から前期の合格者を除いた残りの人数の募集となります。専門学科は50～100％の募集と定められていますが、上限の100％を取る学校がほとんどです。したがって、専門学科はチャンスは前期の１度しかありません。

普通科の場合、前期はチャレンジ傾向があるため、合格率が40～60％ぐらいとなります。前期で不合格の場合は、ダメージが大きいため後期は安全圏に変えることが多いですが、ボーダーラインで落ちた生徒や、タフな生徒は再度同じ学校を受検して合格することもあるため､残り定員の枠や倍率を見て決断するしかありません。

11　出願手続き

出願書類は、公立の場合は中学校でまとめて取り寄せますが、私立は各個人が取り寄せます。出願は、各自で書類を持って志望校に行きます。書類に不備があると出直しとなるので、担任は前日までに出願書類を入念にチェックし、出願の初日に手続きに行かせます。生徒は学校に戻って確定した受験番号を担任に知らせることになります。調査書は、私立の場合は本人に持たせ、公立の場合は別途中学校より高校へ送付することが多いです。

12　調査書（内申書）

中学３年間の全教科の評定、出欠、特別活動、部活動、特記事項、総合所見等が記載されています。特に部活動の実績（県大会上位）や生徒会役員、英検、コンクールでの表彰等はプラスαとなるためたくさん記入しておいたほうがよい。高校側ではこれらを点数化して判断材料としています。調査書の開示請求を念頭に置けば虚偽の記載や生徒に不利な記載はしてはいけません。

13　入試当日

生徒各自が自分で向かいます。駅チェックやグループで行くことは今はしていません。教師は学校待機し、トラブルがあれば動きます。試験終了後、生徒は学校に来て帰校報告をして下校となります。。

14　延納金とは

私立学校が設定している制度で、併願者が合格した場合、「延納金（３万円～５万円）を入金してもらえば、公立の発表までは入学金等の全額払い込みは待ちますよ」という制度です。受験者にとっては、この延納金は返金はされませんので、払う覚悟でいなければなりません。ただし学校によっては、延納金はなしという良心的な学校もあります。（単願推薦の場合は、合格したら全額納入することになります。）

- 私立高校の経営上、受験料や延納金、入学金による収入は、大きな財源となります。高校が、単願推薦や併願推薦制度を導入することによって、受験者の人数や内訳があらかじめ分かるため、受験料と延納金でどれぐらいの収入となるかを読むことができるのです。その意味では、合格者をたくさん出した方が延納金も増えることになるのですが、高校側も、合格者のうちどれぐらい自分の学校に残るのか（歩留（ぶど）まりと呼んでいます）を読んで合格者数を出しています。この読みが外れると大量の生徒を受け入れたり、逆に不足したりして、国からの補助金の額にも影響することになるようです。

15　発表当日

（１）私立の場合は、発表日や時間がばらばらなので、単願の生徒は、各自が結果を見に行き、併願の生徒は、自宅への郵送を待ちます。

（２）公立の場合は、各高校にて３月６日午前9:00に一斉に掲示されるので、各自が結果を見に行きます。教師も教務部と分担して各高校を回り合格を確認します。
と同時に不合格者の封筒を返してもらいます。
　合格者と不合格者は、学校で出会わないように時間をずらして登校させ、担任に報告します。担任は、不合格者と即面談し次の手立てを考えます。翌日、本人あてに高校から合格通知が郵送されて来ます。不合格通知は来ません。

　私立単願で合格していながら、その後に行われる公立の受検校を取り消さず、「受検料も払っていることだし、ためしに受検してみたい。」と言う受験生と保護者がいる場合があります。この場合、行く気も無いのに受検することは、他の受検者の合格機会を奪うことになるので、思いとどまるよう説得します。事前の面談で、先に念を押しておく必要があります。公立の場合は、定員ぴったりに合格者を出しますので、その後取り消しとなると、欠員のため再募集ということになります。更に中学校長も、高校に迷惑をかけたため、高校長に謝罪に出向くことになりますし、来年度以降の入試にも影響しかねません。

16　開示請求（学検点の開示）

公立の合格発表翌日以降１か月間、志願者本人から請求があれば、各高校において調査書および学力検査の得点（学検点）の開示をする制度です。（コピー可）中学校としては合否のボーダーラインを知りたいので、発表翌日に一斉に聞きに行かせることが多い。（不合格の生徒には酷なので、希望する場合には行かせています。）

17　受験なのか受検なのか

私立の場合は「入学試験」なので「受験」を使うが、公立の場合は「学力検査」という名称なので「受検」を使います。保護者にとってはどうでもいいことですが、学校現場では使い分けています。

18　令和元年度なのか２年度なのか

中学校にとっては令和元年度内に行われる入試なのですが、高校にとっては２年度入学者のための入試なので、２年度入試という呼び方をしています。

19　入試制度の変更

令和３年度入試より、千葉県の公立高校の入試制度が変更されます。主な変更点は、

（１）前期選抜と後期選抜を改め、２月末の１回にまとめて実施する。

（２）学力検査を２日間で実施する。

（３）英語の学力検査を６０分で行う。（他の教科は５０分）

＊　これにより、私立入試も日程等の変更が予想されます。

20　禁句

・すべり止めは学校格差を意味するので使わない。「安全圏」を使う。

・学校批判や偏った感想は、三者面談等で教師がつい口走ったときに、その卒業生や関係者が保護者の身内にいることがあるので、しない。

・学校種差別はしない。定時制や専門学校、サポート校に対する偏見等が無いように。

・塾批判はしない。親身になって受験者の合格を願っていることでは共通。

・底辺校と言ってはいけない。しいて言うならば「生徒指導困難校」という。

21　その他

・受験者一覧表の中に、各種学校や就職希望者、特別支援学校志望者等が載っていなかったりして、ないがしろにされることがあるので、配慮を忘れない。同じ進路希望者なのだから。

「主要５科」という呼び方ですが、私は賛成しません。受験問題集のタイトルや塾のweb上などでは普通に使われていますが、確かに試験科目が５科目や３科目なのは事実ですが、「主要」をつけてしまうと、他の４教科（音、美、保体、技･家）は主要ではないのかと考えてしまうのです。

学校現場でも、主要５科という表現を教師が使っていると、生徒も４教科の授業をないがしろにする恐れがあるし、４教科の先生も良い気分はしないと思うのです。ではどう呼べば良いのか。「主要」を取ればいいのです。「５教科」と「他の４教科」でいいと思います。